

三重県経営者協会創立70周年記念講演 三重県知事 鈴木英敬 氏 伊勢志摩サミットを振り返って

サミットの話をする前に、神奈川県相模原市の障がい者施設で起きた、凶悪なそして極めて身勝手な怒りを禁じえない事件について申し上げます。この事件で亡くなられた19名の方々のご冥福を改めてお祈りするとともに、職員の方々を含め26名の重軽傷を負われ、心に大きな傷を負われた方もたくさんお見えになります。これらの方々の一日も早いご回復をお祈り申し上げます。

三重県では事件発生直後に、県立の障がい者施設に対し安全体制の確認、警察との連携、そして地域の皆様との連携に遺漏がないか、そして各施設内部の危機管理、連絡体制の確認を指示しました。あわせて厚労省からの緊急通知を受けて、全市長、社会福祉団体の施設責任者に安全確保の徹底を指示、さらに県庁内関係課、警察、地域機関など関係機関対象の対策会議を開催して、今回の事案の情報共有、対応すべき諸課題の議論を行い、8月2日には社会福祉法人の幹部約500名対象の研修会の冒頭に今回の事案に関する対策の徹底と、各団体、法人の皆様の不安解消の為の課題の抽出を行いました。

また県内には障がい者、障がい児の為の福祉施設が47か所あり、約1,900人の人々がそれらの施設をご利用されています。皆様の会社やご自宅の近くにもそのような施設があると思いますが、それら施設の職員の方々は、少ない人数で24時間体制の勤務にあたっています。そういう施設の方々の尊い命が失われることのないように、施設の職員だけではなく、関係各機関と地域住民・団体の皆さんが協調して、情報共有やお声掛けをして頂くことが事件を未然に防ぐことに最も有効であると考えます。

本日お越しの皆様は企業や地域のリーダーの皆様であると思いますので、今回の事件を踏まえてこれらのことの重要性をさらに深くご認識頂いてなお一層お力をお借りしたいと思います。冒頭にこのようなお願いを申し上げたうえで本題に入ります。

今回のサミットが無事故の大成功のサミットであった事は、県民皆さまのご協力、とりわけ今日お集りの企業・各団体の皆様から沢山のご協力、応援、ご寄付を頂いたからであります。改めて皆様の多大なご尽力に対し感謝申し上げます。

それでは、今回のサミットがどのようなものだったのかを、具体的なエピソードを中心に振り返っていきます。

伊勢志摩サミットは日本で6回目、世界で42回目でした。その第1の特徴は、典型的な「地方」で開催された初のサミットであったということにあります。これまでのサミットは東京で3回、北海道、沖縄で各1回行われました。北海道、沖縄のサミットはそれぞれ担当大臣、担当部局、特別な職員が居て特別予算もつくという特別なサミットでしたが、伊勢志摩サミットは、三重県という地方自治体を中心に行われた初めてのサミットでした。そして二つ目は各国首脳の入国県が隣県であることも初めてのことでした。そのた

めに過去最大の23,000人が配備され、そのうち三重県に16,000人、愛知県に7,000人の警備体制を敷かれました。三重県に配備された警備陣のうち14,500人が他県から配備されました。三重県警は3,000人の組織ですが、そのうち1,500人がサミットの警備にあたりました。

洞爺湖サミットでは、札幌で3,000人規模のデモが起き、警備陣との小競り合いから「公務執行妨害」による逮捕者がありましたが、沖縄でも逮捕者がありましたが、今回は逮捕者、摘発者がゼロという成果を得ました。

今回のサミットは、デモなどの目に見える対策だけではなくサイバーテロという新しい脅威への対策も行うという警備上の大きな特色がありました。サミット期間中に普段の何十万倍ものメールが県庁に送られてき、その中には標的型ウイルスという新しいタイプのウイルスが含まれていましたが、それらをすべて防ぎ切りました。サイバーテロに関しては、主に中国からのウイルスを想定していましたが、結果的にヨーロッパからも多く飛来しました。これらは現実にヨーロッパで起きているテロと関連があるのか、あるいは中国発のウイルスが、ヨーロッパのサーバーを経由して三重県庁まで来たのかまでは今のところ不明ですが、いずれにしろそれらを防ぎ切ったのは大きな成果であり、来る東京オリンピック、パラリンピックにもこの経験が生かされるものと思います。

今回のサミットでは、安倍総理が最も年上でサミット参加回数も多かったためにリーダーシップを発揮しやすい環境にありました。主要参加者は、G7+EU2名の9名でしたが、さらにアウトリーチのアフリカ会議議長国のチャド、ASEANのラオス、南太平洋諸島のパプアニューギニア、国連、IMF、世銀、アジア開発銀行の代表などが参加したこのサミットに参加しました。

まず警備の話をお話すると、今回のサミットは「生活空間」で行われた最初のサミットだったということが出来ます。つまり地方開催となった、洞爺湖、沖縄グテナテラスで行われたサミットは会場となるホテルしかない隔離された場所での開催でした。しかし今回は伊勢志摩国立公園という民有地比率が96%、全国の国立公園の民有地比率は30%ほどですから、極めてその民有地比率の高い所で行われたことがお分かり頂けます。

このように地域の生活と自然の営みが共存する地域での最初のサミットでしたから、生活への影響を最小限に留めながら警備も行うという極めて難しい”連立方程式”を解いての警備の安全でありました。

こういう制約の中で生まれたのが県警本部で立案したのが県下の41機関で作られた「テロ対策三重パートナーシップ」という機関でした。これはテロ対策で最も大切で有効なことは情報収集であり、「地域の安全な状況はその地域に住む住民が最もよく知っている」との基本的考えから、地域の安全を脅かすおそれがある変化や異常は地域住民がいち早くそれを感じるという考えのもとに生まれた組織でした。この組織を基本に、関連する18の警察署にも同様のパートナーシップを組織しました。たとえば伊勢市では自治会の皆様で地域のパトロールをして頂き、四日市の塩浜地区の自治会の皆様にはコンビナート周辺

をパトロールして不審者のチェックを行って頂くなど、県民上げてのご協力の上に安全を実現することが出来ました。

さらに保健医療、とりわけ救急搬送体制は三重県民の救急医療に影響が出ないように新たな搬送体制を組まなければならないという厳しい課題の下で、新たな体制を構築しました。幸い何件かの出動はあったものの、サミット首脳レベルでの深刻な救急搬送はありませんでした。加えて、食品衛生対策にも万全を期しました。サミットではどのような食材やお酒が供されるのかなどの情報を求められましたが、安全を脅かす情報漏洩もなく、サミット史上初めて女性が総料理長を勤めまるなど、多くの話題を提供しながら、水道対策も含めバイオ・テロ対策を実施し、サミットでの食の安全を確保しました。

さらに今回は新たにドローン対策も必要でした。ドローンによるテロ対策、落下などの事故対策も必要でドローン規制条例を作り、飛行禁止地区を綿密に設定することなどにより安全の確保を致しました。消防に関しても、全国1,000名の応援を頂き全国に少ない特殊機器も持ち込んで頂き備えました。

これらは県民の皆様のご協力により構築できたことから、冒頭で相模原市の事件のことで申し上げました通り、安全は警察などの単独の機関だけでは実現できるものではなく地域の皆様が少しずつでも関わることにより確保できたことから、この経験を生かして、今後の三重県の安心・安全を実現するために、県民が作る安全な社会の提言、例えば「県民の力で地域の安全を守るアクションプログラム」のようなものを作って、今後も「安全な三重県」の実現に取り組んでいきたいと思えます。

サミット首脳宣言の中に「女性活躍」「環境」「気候変動」などが謳われましたが、サミットで得た経験を成果を活かして、三重県でも今後も宣言に即したテーマの国際会議などを開催して行きたいと思えます。まず9月には鈴鹿サーキットで「女性活躍の為の国際フォーラム」を開催し、10月には鳥羽で海岸浮遊ゴミの処理対策をテーマとした「海ゴミ・サミット」を開催します。今後もこのようにサミットでまとめられた宣言に基づく活動に取り組んでいきます。

それでは今回のサミットの様子を折々のエピソードを交えてご報告していきます。

5月26日安倍総理が伊勢神宮宇治橋で各首脳をお一人ずつお迎えして境内に入りました。この日の各国首脳はいずれも笑顔でしたが、この前日行われた日米首脳会談は様子が違いました。この会談の大きな議題となったのは沖縄で起きた米軍属による婦女暴行致死事件で、これに日本側が強い抗議の意思を示しました。ですからこの会談中も、その後の記者会見でも両首脳に笑顔はありませんでした。ホテル側の話では首脳会談後オバマ大統領は食事もとらず翌日の広島での17分間のスピーチの原稿のチェックと、リハーサルを別室で深夜まで行ったそうで、大統領としての自覚と、今回のサミットでの成果を世界平和に近づけなければならないという強い思いが感じられ、首脳たちの気概のようなものに触れた思いで、大変感動致しました。

その厳しいやり取りの翌日の伊勢神宮参拝は、お互いに申し合わせたわけではないのに、

日米両首脳はじめ皆様笑顔での参拝になりました。

この参拝でご苦勞されたのは神宮の神官の方で、外務省や報道関係者からの指示を受け首脳の先導には大変苦勞をされたと思います。お一人ずつ入られる参集殿前でお迎えするのが岸田外務大臣と私の役割でしたが、お迎えしたあと安倍総理が伊勢神宮のあらましを各首脳に説明されました。入城の順番も外交上の慣例で決まっており、総じて皆さん活発に会話を交わされますが、各国首脳がそれまでフランス語で話していたのに、キャメロン英首相が入った途端、英語に切り替わった光景は大変面白く感じた瞬間でした。

参拝の後記念の植樹を行いました。ここでは私が植樹の意味などを説明を致しました。前日の打つ合わせでは外務省から「知事、『どうぞ!』ときっかけの言葉だけ、とにかく短く、お願いします」と言われていたのですが、開催県の知事としてはそういうわけにはまいりません(笑)。英語で神宮杉の話などにとどめて説明しましたら、首脳の方々からは「もっと、いろいろ説明したら」という空気感を感じました。

この植樹ではスコップを渡す役割を、伊勢市、鳥羽市、志摩市、玉城町、大紀町ら七つの市町の五年生を含む小学校五・六年生二十人にお手伝い頂きましたが、全首脳がその子供たちに声をかけていました。

私は安倍総理が話しかけた以外の子供たちに「各国首脳から何を聞かれたの」と聞きました。ふつう日本人はこういう時「何年生?どこの小学校?何歳?」というその子の属性を聞きますが、彼らは「お名前は?」とその子の基本的アイデンティティである名前を聞いたそうです。このことから相手がたとえ子供であれ相手のアイデンティティを認め受け入れその中に入り込んでいく姿勢は、リーダーとして非常に重要なことであるということを感じさせられました。親しく名前を聞かれた子供たちが喜んでた様子から、「個」の特性に合わせたコミュニケーションが大切だと改めて築かされた思いでした。

サミット期間の天気予報は悪かったのですが、期間中天候には恵まれました。特に首脳が御垣内に入った頃が一番天気は良かったと思います。実は私は安倍総理周辺から「晴れたら総理の功績、雨なら知事の責任」と冗談ではありますが、言われており自分にとってアウトオブコントロールなことに、ストレスを感じなければならないという、非常につらい状況におかれていました。そこで内密で東京・高円寺に日本唯一の気象神社があり、そこに5月23日公務の合間に一人でひそかにお参りし、下駄の形をした絵馬に「晴天祈願」と書いて奉納しました。総理のおかげか私の参拝のご利益か定かではありません。

今回は「政教分離」など微妙な問題もありましたが、すべてのプロセスにおいて内閣法制局において確認の上行いました。御垣内に入る際には、安倍総理は「自分は神前で一礼して入場するが、皆さんはそれぞれのお考えで」と説明する気配りを致しましたが、各国首脳は安倍総理より深々と神前で一礼されたと聞きました。おそらく各首脳にも伊勢神宮の空気というようなものが自然に伝わったのだと思います。とりわけドイツのメルケル首相はいたく感動されたようで「日本の強さの源泉を見た。シンゾー有難う」と安倍首相に感想を述べられたそうです。そのメルケル首相の所作で印象的だったのは他の首脳と違い、

人々の歓迎や報道陣に応える時、決して右手を上げてなかったことでした。これはドイツ国内法でヒトラーを連想させる行動が禁止されているからだと後で聞きました。

最初の食事であるワーキングランチは、今回のサミットの為に改修した昭和二十六年創業時に建てられた赤い屋根の旧館内の部屋で行われました。この場で鈴鹿の「作」、大台の「八兵衛」が使用されましたが、サミット後、両酒ともたくさんの注文が入ったそうです。その後のワーキング・ディナーで一番好評だったのは伊勢エビのクリームスープだったそうで、各国首脳はお互いによく会話を楽しまれますが、この時ばかりはただ黙々とスープを味あわれたそうです。また首脳の中で一番酒をたくさん飲んだのはドイツの女性首相のメルケルさんだったそうで、出たワインや酒をすべて召し上がったそうです。

そういう雰囲気の中でリーマンショックなどのシビアなやり取りを交わしたというのですからやはりすごい人たちだと改めて感心させられました。

食事には269種類の三重県産の食材をはじめ、食器、酒、万古焼などで全て県産のものを使用しましたが核国首脳にも満足を頂き、食事後、総料理長の広瀬ひろえさんが食事の場に呼ばれ、フランスのオランド大統領やメルケル首相から賛辞を受けました。

翌日のアウトリーチを含めた会議ではオバマ大統領が二重になった弁当の上の部分が蓋だと思い、こぼしてしまうというハプニングもありました。

また配偶者プログラムでは、神宮参拝の後、相可高校生徒によるランチを提供しました。生徒が最も得意とする「だし巻き卵」を目の前で調理し、松坂牛はすき焼き風の調理でお出しする等、ここでもほとんど三重県の食材で配偶者のおもてなしをしました。この一週間前に試食を兼ね、本番さながらのリハーサルを行いました。高校生の彼らには普段の「孫の店」ではすることのないお酒を注ぐなどの動作が入るため、この部分は赤福さんから来て頂いた女性の方々にお酒の給仕はお願いして、普段は無い連携プレーも、本番では皆団結して見事にやり遂げてくれました。

このあと配偶者の皆様は御木本真珠島を訪れ、歓迎の伊勢音頭を一緒に踊って頂いたり、海女の実演を楽しんで頂きました。伊勢音頭は「伊勢っ子」と言われる子供たちのグループが演じてくれましたが、子供たちがトルドー・カナダ首相夫人のソフィーさんとお話が出来たというので「行って来い」と言いましたら、ソフィーさんにハグされて感激した子供たちが泣き出すハプニングがありました。この日まで長い期間練習を続けたので努力が報われたと感じてその達成感で感極まったからでした。

サミットでは、いろいろな経済効果がありまずはこれを活かしていかなければなりません。知事といういわば地域の経営者という立場で言えば、これからを担う若い人材のモチベーションが高まり、あるいは人材の進路を決める大事なきっかけを与え、僭越ですが私は「人あつての経営である」と思いますから、そういう意味で今回のサミットは経済効果だけに留まらない大きな意義があったと思います。

この配偶者プログラムでは昭恵夫人の希望でお酒は被災地、東北三県と熊本に限定し選びました。またドイツのメルケル首相の旦那様ザウアー氏は本国ではあまり表立った行動

をしないのでドイツメディアの注目を集めたようです。神明小学校の生徒のお手伝いを得て植樹も行い、翌日一行は国際メディアセンター三重情報館を訪問し、度会町の中森さんに起こし頂き、手もみの茶の実演して頂きました。

G7以外の首脳では、ベトナムの首相が前日のサミット首脳の伊勢神宮の参拝の様子をご覧なり、「行きたい」と希望されましたので私が同行しました。首相は初の来日、しかも初外遊ということで主要閣僚も同行を希望し、アウトリーチ会議の時揃って伊勢神宮参拝の後松阪市まで足を延ばされました。松阪市はベトナム・ホイアン市と友好提携があり、さらに松阪木綿のデザインの起源がベトナムにあり、またホイアン市付近では伊勢うどんに似た「ホウ」という麺類があるなどのいろいろなご縁もあり、松阪との交流をさらに深めたいということからの訪問でした。また、キャメロン首相と同じ飛行機で来日したイギリスメディアの一行は皇学館大学を訪問頂きました。

首脳と配偶者、それ以外の参加者を区分するため、真珠振興協会で特別にデザインしたラベルピンを作りましたが、いつもシックな装いで国際会議の出席経験が豊富なIMF専務理事のラガルドさんは、ほとんどそのようなラベルピンなど付けたことがないのに、今回のラベルピンは高い評価を頂き身につけて頂きました。ラガルド専務理事はこれがきっかけで真珠島の見学を急ぎよ訪問とされました。一般に真珠は十ミリ以上の大玉に人気があり目立ちもしますが、三重県の真珠は3ミリから5ミリの「厘玉」と言われる小ぶりのものにも関わらず、輝きや照り、表面の滑らかさが特徴で、小さいのにそのような特徴を出すのは高度な技術が必要なのです。その英虞湾産の真珠をあしらった今回のラベルピンは大好評で、そのためラベルピンは一般にも販売しております。

新設のメディアセンターには三重情報館を設け情報発信を行うとともに、県下35の酒蔵のお酒の全てをここで提供しました。12,709人のメディアの方々に来て頂きましたが、97%三重の食材で供した食事とともにサミット取材二十年というベテランの方にも「こんなおいしいものは初めて」と高い評価を頂くなど、大変好評でした。

また、色々ご議論を頂きましたアネックスは、建築基準法の規定から壊さなければならないのですが、それではもったいないので、しばらくの間子供たちを中心に一般公開し、サミットの様子を想像頂きました。

オバマ大統領が伊勢神宮で平和への祈りをして頂いたのちにサミットの日程を終え、広島に行って頂いたのは大変意義のあることだと思います。

広島県の湯崎知事とは、年に一度、交互に三重と広島で定期的に対談をしておりますが、今回は三重で行う予定ですからできれば、今回のサミットと広島訪問を踏まえて、知事同士の対談だけではなく、県民市民の皆様にも加わって頂き「平和」に関するイベントも出来ないかと考えております。広島と伊勢からの平和に向けての強力なメッセージの発信をしたいと考えています。

経済効果に関しては百五総合研究所で1,110億円の試算を出して頂きましたが、今後もこれを実現するよう努力致します。

平成27年度の外人観光客は通年伸び率全国2位、サミット決定後は一位、今年も全国3位、国内旅行者を含めると2位。直近の数字でも6月の数字で伊勢神宮が前年比20%増、外人だけを見れば30%増、同じく7月は半ばまで前年比で倍増の実績になっており、おかげ横丁など多くの方々に来て頂いております。

サミット期間以外にも県民の皆様に多大なご協力を頂きました。100日前から始めた「クリーンアップ活動」は6万人以上の方々29市町全てで参加頂きました。50日前から始めた「花一杯運動」も29市町全てで行い11万本以上の花で飾って頂きました。経営者協会会員企業様はじめ5億2千600万円の寄付を賜りました。協賛応援活動も約1千件も頂きました。これらのおかげで、財政厳しい中、様々な事業を展開出来ました。

海外のプレスツアーも22回にわたり、36か国の皆様に来て頂きました。

はじめはこちら側から伝えたいことばかり押し付ける形でしたから、あまり記事になりませんでした。途中から方針を改め、プレスの方々が何を取材したいのか、丁寧な議論を重ねることにより記事になることが増えてきました。台湾の記者の方々などは台湾の企業ホンハイがシャープを買収することについて知事はどう考えるかなどについてインタビューをしたいという希望があり、これらを含めて海外プレスに三重県を知って頂く多くの機会を得ました。

先ほども申し上げました通り、結果的に次世代へのチャンスを与えたということは今後に大きな財産になったと思います。ジュニアサミットも日本代表だった桑名在住の上堀内陸王君らに参加して頂きましたが、このジュニアサミットでも大人の想像を超える現象が起きました。長島温泉・花水木を会場に行われましたが、小さな例かもしれませんが、事前に外務省の職員からは、G7の高校生たち、温泉など一緒には入らないと聞かされていたのですが、陸王君らが「みんなで温泉に入ろうぜ」と呼びかけたら全員入りまし、また「桑名ナイト」と名付けた桑名市民会議の皆様が主催した会では、同じように外務省からはハマグリなど食べないよと聞かされていたのですが、陸王君ら子供たちが「うまいよっ！一緒に食べよう」と声をかけたらみんな喜んで食べる、という予期せぬ行動がありました。このように私たちが想像する以上に子供たちはチャンスを生かそうとするし、そこで得た経験が彼らの財産にしていく光景を目の当たりにしました。

このように新しい人材を育てていく、若い世代にチャンスを与えていく、そういったことの大切さをこのサミットを通じて改めて認識致しました。

今後マイスやインバウンド、その他色々なイベントをやっていきますが、これらはあくまでチャンスでしかありません。これをいかに生かしていくかが重要です。

サミットまでもお力添えを頂きましたが、その後こそ県民の皆さんのお力が必要となります。

10月には全国エコツーリズム大会を誘致していますし、来年は「全国お菓子博」、更にはその翌年は「全国総体」と、これらのイベントをしっかりこなしていくのは無論ですがこ

なすだけでは将来に何も残りません。サミット同様に、それらをきっかけとして子供たちが新しいことにチャレンジするようになったとか、あるいは事業者の皆様が新事業にチャレンジするようになるなど、これらを機会創出と捉えて新たなステージを目指す、新たな利益を追求すること大切であると思います。

今回のサミットの成果を今後につなげるには、皆様のご理解、ご協力、ご指導がなければ出来ません。重ねてご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。最後になりますが、創立70周年のお祝いを申し上げて話の締めくくりと致します。ありがとうございました。

文責：三重県経営者協会事務局